

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2階
TEL : 078-252-8280 FAX : 078-252-8281
e-mail : blrhyg@extra.ocn.ne.jp URL : <http://blrhyg.org/>



所長の諏訪山だより

男はこまるよ

今井正監督の劇映画に、貧困にあえぐ家族の解体と再生を描いた『どっこい生きてる』（1951年）という秀作がある（今回も今井作品から始まり、恐縮です）。この映画の主人公（河原崎長十郎）は失業対策事業就労者（ニコヨン）だ。映画の冒頭、まだ薄暗い早朝の大通り、そこかしこの辻から人びとが出てきて、大通りを小走りに行く。路面電車が停留所に近づき減速すると、まだ停まりきっていない電車から次々と人びとが飛び降りる。これらの人たちは職安出張所に向かう失対就労者たちである。日雇い仕事の紹介を受けるために職安に急いでいるのだ。職安出張所の前の広場には、すでに多数の人たちが行列をつくっている。朝食をとらずに来た人が多いためか、何軒もの屋台が出ている。職安の窓口が開き、行列の人たちが急に動いたとき、人の列に切れ目ができないように、並んでいる人たちは、みんなが自分の前にいる人の両肩に手をかけている。割り込みを防ぐためだ。1960年の被差別部落の生活実態を描いたドキュメンタリー映画『人間みな兄弟』（亀井文夫、1960年）でも、和歌山県御坊市の職安事務所の窓口で「アブレ手当」を授給するために失対手帳に認定印をもらう人たちの混雑ぶりが紹介されていたが、今井作品も綿密な取材のうえで撮影されたのだろう。とてもリアリティのある映像だ（作中の木賃宿の映像も見である）。

失対事業は、敗戦後の失業者の急増に対応すべく、1949年に制定された「緊急失業対策法」（1996年廃止）にもとづき実施された。当初、失対就労者は男性が多かったが、高度経済成長が始まると、失対よりも条件のよい仕事が増え、まず若年男性が失対から離れていった。そして、中年男性がこれに続いた。その結果、失対就労者に占める女性の割合が上昇した。景気の好転は男性からその恩恵を受け、不況になると、そのしわ寄せは女性から始まるのは、いまでも同じである。失対就労者の女性割合の上昇にともない、失対就労者の労働組合である全日本自由労働組合の役員にも女性が多くなった。

女性の組合役員が増えると、女性主導で組合として日用品や食料品の共同購入が始まった。この共同購入の取り組みは、個々の主義主張や党派の違いを越えて、組合全体で順調に運営され、組合員の生活を支えたという。男たちの労働運動は、主義主張にこだわり、党派性が前面に出て、分裂を繰り返すことが少なくないが、この女性たちの労働運動は、とても協調的だったようだ。

1960年代末の米国で、差異派フェミニズムが、協調的で、寛容であるという、女性もつ本来の特質を全面開花させることが男中心社会の諸矛盾を解決すると主張したが、そのとおりかもしれない。対立・分裂を繰り返す男の運動は、困ったものだ。ホントに「男はこまるよ」だ。

所長 石元清英



まんがのすゝめ

『弟の夫』アクションコミックス1～2巻（以下、続刊）

田亀源五郎／2015年、2016年／双葉社 定価：620円＋税

6月10日に放送された朝日放送「探偵！ナイトスクープ」で、「通天閣の上から叫ぶ」という依頼があった。探偵の真栄田賢が道行く人に声をかけ、日ごろ、心に抱えるモヤモヤを通天閣のてっぺんから叫んでもらうという企画。誰がどんなモヤモヤを叫ぶのか、興味新々で見ていると、いがぐり頭で白のランニングに短パン姿、「裸の大将」を彷彿とさせる40前後の男性が登場。探偵の真栄田に「おにぎり好きでしょ？」とつつこまれながら、通天閣のてっぺんへ。大きく息を吸い込んで、声を限りに叫んだ言葉は、「そろそろ新しい彼氏が欲しい！！」であった。会場は騒然。真栄田が感想を聞くと、「すっきりしました」。家族や職場に支障はないかと聞くと「知らない人もいるけど、これを見て知ってもらえるので良かった」ときっぱり。おもいがけないカミングアウトに意表を突かれたが、いろんな意味で考えさせられた。



日本でLGBTの問題が取り上げられ始めたのは、ここ数年。外国では同性婚を認める国が多くなってきたけれど、日本では同性カップルのパートナーシップを認める自治体がわずかに5つあるだけで、まだまだ理解にほど遠いのは、私も含めて、上記テレビ番組の反応通り。

さて、今回ご紹介する『弟の夫』は、ゲイ（男性同性愛者）について取り上げた作品である。

ある日、娘の夏菜と二人暮らしの弥一のもとに、カナダからマイクと名乗る男がやってくる。マイクは弥一の双子の弟リョージの「夫」だという。最初は驚く夏菜だったが、マイクと叔父の関係について、素直に疑問を投げかけながら、次第に仲良くなっていく。一方、父親の弥一は、弟からゲイであることを打ち明けられても、心底受け入れることができなかった自身の偏見や葛藤を、マイクと夏菜のやり取りを見ながら、次第に解きほぐしていく。

夏菜がマイクに問う。「マイクとリョージさん、どっちが旦那さんで、どっちが奥さんだったの？」。娘の質問にうろたえる弥一をしり目に、マイクが答える。「奥さんいません。どっちもハズバンド」「私とリョージ、どっちも男の人でしょ？だから私のハズバンドはリョージ。リョージのハズバンドが私」。「そっかあ」と素直に納得する夏菜と、目からうろこの弥一。

物語はほのぼのとして、とても読みやすい。ちなみに作者の田亀源五郎自身もゲイで、「ゲイ・アート」の巨匠と呼ばれる人であるが、作品への思いをネット上のインタビューで、次のように話している。「経験から言ってストレートの方と親しくなったときに、生まれて初めてゲイを見たというようなことをおっしゃる方がとても多いんです。そうすると、分からないがゆえの誤解もある。漫画のキャラでもいいから、まずゲイの知人を作ってもらい、誤解を解くきっかけになればという気持ちで描いています」。

単行本には「マイクのゲイカルチャー講座」と銘打ったページがあり、「同性婚」や「レインボーフラッグ」など、ゲイに関する解説が、わかりやすく添えられている。とりわけ「カミングアウト」の解説は、大変深い。LGBT理解のための教材としてもおススメの作品だ。(K)



本の紹介

『耳鼻削ぎの日本史』

清水克行著、洋泉社歴史新書y、2015年6月、定価950円＋税

日本では中世から近世にかけて、戦功の証として敵の首を持って行くのが困難なとき、その代用として耳や鼻を削いで持って行くことがあった。また、耳や鼻を削ぐ刑罰も存在して

いた。

耳や鼻を削ぐと言えば、豊臣秀吉と“耳塚”のことを思い出す人が多いのではなかろうか。16世紀末の文禄・慶長の役の際、日本の諸将が秀吉に戦功を示すために朝鮮の人々の鼻を削ぎ、日本へ送った。送られた鼻は供養のために京都の方広寺大仏殿前に埋められた。その塚は“鼻塚”と呼ばれるようになったが、17世紀中頃から“耳塚”と誤伝されるようになった。これは首の代用として鼻を持って帰った例である。

もう一つ、日本史上で有名な耳鼻削ぎと言えば、鎌倉時代の文書「紀州阿氏河荘百姓申状」(1275年)の例である。この文書では、阿氏河荘の地頭が百姓らに対して、耕作者が逃げた畑も耕すように命じ、それに従わない場合は百姓らの妻の「ミミヨキリ、ハナヲソギ」髪を切つて尻にするぞと脅したことが告発されている。これは刑罰としての例である。

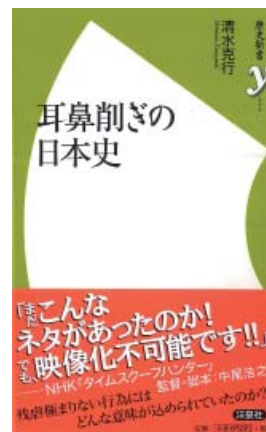
今回紹介する『耳鼻削ぎの日本史』では、様々な史料を検討し、日本における耳鼻削ぎという行為の変容と消滅について概観している。また、日本の枠を超えて広く世界史的視点からも考察しており、考えさせられることが多い。そこに浮かび上がってくる耳鼻削ぎの有様は、多くの読者にはきっと意外なものであろう。

例えば、先述の「百姓申状」の解釈である。これは、日本史の教科書に載っており広く知られているが、衝撃的で猟奇的な内容から「地頭の残虐な暴力の実態を生々しく描いた被害者側の貴重な証言」として、横暴な権力に虐げられる民衆といったイメージ作りに長らく利用されてきたものだ。しかし、そういった解釈は妥当でないことが本書で明らかにされている。秀吉の命による朝鮮における鼻削ぎについても、従来の日本国内でのものとは異なる、特異なものであったことが述べられている(いずれも詳細は本書に譲る)。

また、本書では全国に残る耳塚・鼻塚の由来についても逐一検討されており興味深い。京都の耳塚以外は耳や鼻を埋めたとわかる史料はなく、明らかに虚構であるものが多数あるということだ。

著者である中世史家の清水克行には『日本神判史』(中公新書)、『喧嘩両成敗の誕生』(講談社選書メチエ)という著作がある。これらにおいても本書同様に、中世から近世へと移り変わるなかで、人々の価値観が大きく変わっていく様を描き出しており、本書と併せて読まれることをお勧めする。

(かま)



『これからの部落問題学習プログラム』発行のお知らせ

ひょうご部落解放・人権研究所は、これからの部落問題学習プログラム作成研究会を立ち上げ、教職員に向けた、部落問題学習にとりくむヒントとなる本の出版を目指しています。部落の今を伝えることで、根拠のないマイナスイメージを払しょくし、児童・生徒たちが「差別を許さない心」を育んでいけるようにと考えました。

【内容】

- I. はじめにー差別とは何か
- II. 差別の無限拡性
- III. なぜ部落問題を学ぶのか(教えるのか)
- IV. 現在の部落問題(さまざまなデータから)
- V. 部落の歴史ーなぜ歴史を学ぶのか
- VI. 具体的な授業事例の紹介 ほか

2016年度末発行予定

この本を手掛かりに、ひとりでも多くの教員の方々が学校で部落問題にとりくんでいただけたらと願っています。

編集：(社)ひょうご部落解放・人権研究所
発行：解放出版社

● 2016年度人権歴史マップ連続セミナー第3回

「神戸の夜間中学校」

- 講師：草 京子さん（元神戸市立中学校教員）
- 日時：2016年9月10日（土）14：00～15：30
- 会場：のじぎく会館ふれあいルーム
- 参加資料代：【一般】800円【会員・定期購読・学生】500円

敗戦後の混乱が続いていた1947年4月、小学校6年・中学校3年の義務教育が実施されますが、様々な事情で学校に通えない多くの子どもたちがいました。そうしたなかで、現場の教師たちの熱意に支えられ、全国各地に夜間中学校（夜間学級）がつけられていきました。1954年には87校となりピークを迎えます。しかし、文部省（当時）は法律で認められていない学校だとして非難、規制を強めていきました。こういった流れに抗して廃校反対運動、増設運動が行われましたが、その数は全体的には減少していきました。

兵庫県内でも、1963年には、神戸市立丸山中学校の夜間学級だけになりました（後に増設される）。この夜間学級は、1950年、神戸市長田区の被差別部落である番町地区内にあった西野幼稚園の園舎を借り、丸山中学校・室内小学校分教場として始まりました。教育振興が部落解放に一番大切なことであるというGHQのコレティー氏の助言を受け、番町地区改善対策委員会の運動が実を結んだのです。1957年には室内小学校の分教場は廃止されましたが丸山中学校単独の分教場として存続し、1964年には丸山中学校西野分校となりました。



現在、丸山中学校西野分校がある太田中学校

夜間中学校が次々に廃止になるなかで西野分校が存続したのは、部落差別とそれによって引き起こされる貧困のため、戦後の混乱期を経てなお厳しい現実があり続けたためです。その後、1995年の阪神・淡路大震災で校舎が倒壊、須磨区の太田中学校内に名称もそのまま「丸山中学校西野分校」として移転し、現在に至っています。

今回セミナーでは、夜間中学校に長く携われた元中学校教員の草京子さんに、ご講演いただきます。



番町に遺る西野分校門標

事務局から

- 40過ぎの友人（男）が20代前半の方と今度結婚します。某調査によると男性40～44歳の5年後結婚率は1.8%。しかも彼は非正規職。たいしたもんです！（Ka）
- 「チーーーーーー」「キキキキ」「ジジジジ」「ギーー」「シャシャシャ」「ミンミンミンミン」蝉さんは元気に大合唱。夏・夏・あつい季節到来！（I）
- 9/10から待ちに待ったUSJのハロウィーン・ホラー・ナイトが開催されます！！パーク内はゾンビだらけ（>_<）♡ドキドキが止まりません！！ハレの世界を堪能してまいります♡（ひ）
- 元日本軍「慰安婦」を描いた映画「鬼郷（クィヒャン）」が日本でも自主上映され始めた。予想通り正式公開には至らなかったが、関西上映の際はぜひともご覧いただきたい。（K）
- 相模原市での「ヘイトクライム」。それを生み出したもの…。私の母も晩年は病気の後遺症で「重度障害者」だった。言葉にならない感情が全身をめぐっている…。（H）